

## 生命の価値とは何か？

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学

川本 隆

千葉県南房総・館山に「シャークスクランブル」で世界的に有名なダイビングスポットがある。「サメと一緒に泳げる」名所として人気が高い。サメといっても性格のおとなしいドチザメである。人に危害を加えないし、警戒心が強く通常は人に寄りつかない。ところが、ここ「沖前根」というダイビングスポットでは、餌付けによって500匹ものドチザメがトルネード（シャークタワー）をなしてダイバーたちを迎える。世界的にもめずらしいスポットとして、海外から多数のダイバーたちが集まってくるという。このスポットができたきっかけは漁業被害だった。過去には定置網にかかったサメが、網だけでなくヒラメやヒラマサなどの魚を傷つけ年間500万円もの被害をもたらしていたが、あるダイビングサービス店店主が漁師たちと協力し、通常では困難といわれるサメの餌付けに成功し、新しいダイビングスポットを開拓したのだ。サメを駆除することなく漁業被害を減らした取組みとして、海外の雑誌でも紹介され、国内外の注目を集めている。

「サメと人間の共生」を象徴するこの事例は、ユニークかつ画期的なものである。大学の講義で動画を見せると「シャークタワーは圧巻。人間と自然の共生への一つの道、理想の形」と絶賛する学生もいた。ダイバーたちはサメと触れ合え、現地の人々は観光スポットとして集客が見込め、猟師たちは漁業被害から解放され、サメたちは駆除の対象から外される。それぞれにメリットがあるという点では、ウィン・ウインの関係が築かれている。

一見、理想的に見えるが、このモデル・ケースに問題はないだろうか。気になるのは、この例で「ウィン・ウイン」といえるのは、あくまでも「ドチザメと人間」だけで、食用となる魚たちの生命価値はさしあたって考慮されていないという点だ。魚に価値があるとすれば、市場取引における「商品価値」のみである。美味で採取量の少ない魚は値が上がるが、高級魚でも傷ついてしまえばゴミとして廃棄されてしまう。つまり、この場合の「商品価値」とは、人間の食用として利用できる価値、いわば人間中心主義的な使用価値にすぎない。少なくとも、食べられる側の価値、魚自身の価値、魚という「生命そのもの」の価値は、さしあたって考慮されていない。この点を追及すれば、論調は人間以外の「生命」をより重視する

立場、人間のご都合主義的エゴイズムを批判する立場におのずと傾く。いわゆる「生命中心主義」である。しかし、この立場から人間中心主義の欺瞞性（この例では、サメの保護に話題を集中させ、他の生物を人間が食することを不問に付す欺瞞）を追及し、人間のエゴイズムを否認することが、倫理的に正しい態度といえるのだろうか。答えは、単なる人間中心主義でも、単なる自然中心主義でもない、両者の中間点にありそうだが、いまひとつ判然としない。ここには「生命」をめぐる環境倫理を考える際の解きがたい難題（アポリア）<sup>1</sup>が含まれている。

改めて問い直したい。「生命（いのち）」の価値とは何か。あるいは、生命の価値を尊重するとは、いかなる態度を指すのか。参考になると思われるのは、ピーター・シンガーの「動物の解放」論とディープ・エコロジーの提唱者アルネ・ネスの「拡大自己実現」の思想である。本稿では、「生命」「平等」という用語に注目しつつ両者の立場の異同を明らかにし、今日の状況下で「人間と自然との共生」がいかなる意味で可能かについて検討を試みたい。手順としては1. シンガーの「種差別」論、2. シンガーの「人格」概念、3. ネスの「自己同一化」論、の順に論を進めてゆくことにする。

## 1. 「動物解放」論の基礎：シンガーの「種差別」論

人間以外の生物との共生を考える際、尊重あるいは配慮されるべき「生命」の範囲をどこまで拡張すべきかという問いは、常に問題となる。『動物の解放』の著者ピーター・シンガーが、動物の「生命」に配慮すべく導入した判定基準（「いのち」の線引き）は「痛み」だった。彼は、動物の苦痛に配慮し、動物実験や工場畜産といった人間の恣意的濫用から動物たちを解放せよと説いた。告発の対象は、（じかに手を下さずとも）動物を手段として利用することに異を唱えず、今日に至るまで動物虐待の事実を黙認している西欧の伝統的価値観の支持者たちである。シンガーは、ヒトという種のみを特別視し、動物を道具として利用する人間の態度を「種差別 speciesism」と呼び、人種差別に類するものとしてこれを強く批判した。『実践の倫理』とあわせ、シンガーの『動物の解放』は、動物虐待への警鐘、動物の権利運動を活性化という点で、今日でも社会的影響力をもち続けている。ただし、彼の論は（現代の応用倫理において避けられないことだが）近代の「権利」「人格」等の普遍概念を状況にあわせて相対化するため、用語が多義的（もしくは曖昧）になり、議論が拡散してしまうきらいがある。錯綜や誤解を解くために、まずは彼のいわんとする骨子を筆者なりに整理し、主要な問題点を摘出してみるとしよう。

シンガーは「種差別」のルーツをユダヤ教と古代ギリシア思想に求めている。前者については、『聖書』創世記の「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」に象徴されるところの「宇宙における人間の特別な位置」<sup>2</sup>が、後者については、人間を「理性的動物」と規定したアリストテレスの定義がとりあげられ、両者を「種差別」の端緒とする。その後、キリ

スト教においてこれらの思想は統一されるが、シンガーによれば、両者に共通する「人間の特別な位置」が不幸にもキリスト教内部で継承された。引き合いに出されるのは、聖アウグスティヌスの「われわれ人間と獣や木との間には共通の権利などはない」<sup>3</sup>という言葉、聖トマス・アクィナスの「人が動物のために植物を用い、また人間のために動物を用いることは、哲学者が指摘している通り、道に外れてはいない」というアリストテレス『政治学』第1巻第8章からの引用などである。もちろん、聖トマスが動物虐待に対して反対していた事情はシンガーも承知している。しかし、その反対理由が「人間に対する虐待を助長する恐れがある」という（動物の立場を考慮しない）人間中心的なものであるかぎり、西欧に特徴的な人間の特権意識が顕現しているとみて、シンガーは「これ以上に種差別の本質をはっきり示す議論はあるまい」と述べるのである。

こうした動物に対する人間優位の姿勢は、カントにおいてもさほど変わりはない。たしかにカントは、人間が「動物を暴力的に、また同時に残虐に取り扱うこと」を戒め、「単なる研究のためだけの苦痛の多い生体実験」は忌避されるべきとし、「年老いた馬や犬からの永遠の奉仕に感謝すること」が人間の義務であるとさえ主張した。しかしカントのいう動物配慮の義務は「間接的」なものにすぎず、「直接的」には「人間の自己自身に対する義務にすぎない」(KS, VI 443)。一方で、人間は人格として「目的それ自体としての人間性」を含んでいるがゆえに「物件」ではなく (KS, IV 429)、「たんに手段としてのみでなく、つねに同時に目的それ自体として扱うべき」(KS, IV 433)といわれるが、他方、動物は「物件とみなされる」(KS, XXVII 373)のであり、「たんに手段としてのみ存在する」(KS, XXVII 458)にすぎない。こうした弁明は動物解放論者からみると、体裁をとりつくろったスピシージストの言い訳にしか聞こえず、メアリ・ミッドグレイなどは「不十分な道徳理論に固執している他の多くの人道的な人びとと同様に、彼〔カント——引用者〕は……巧妙だが説得力のない理由をのべた」<sup>4</sup>と指摘する。彼女がいうように、このような論法が「カント以後もずっとつかわれてきた」とすれば、「良心のとがめを感じないで動物に対して暴力をふるうこと」への道を開き、動物実験や工場畜産の悲惨な現状を黙認し肯定することにつながる。追認しているわれわれ自身もまた批判の矢面に立たされていることになろう。キリスト教が17世紀から19世紀末に至る西洋近代哲学に「人間の優越性」という負の遺産をもたらしたとみるドゥグラツィアも、「多大な影響力をもったカントの道徳哲学においては、自律すなわち自然の因果的決定論からの自由は、人間による動物の利用を正当化するうえで重要な役割を果たした」<sup>5</sup>と皮肉まじりにのべている。

さてしかし、こうした「痛み」に焦点を合わせた動物解放論で気になるのは、彼らのデカルト評価である。キリスト教の魂不死説の影響下でデカルトは「動物機械論」を提唱するにいたるが、この事情をシンガーは次のように評している。

……デカルト哲学において、動物は不死の魂を持っていないというキリスト教の教義は、かれらはまた意識ももっていないという驚くべき結論に導かれた。……動物は、ナイフで切られたとき、悲鳴をあげるかもしれない……が、……苦痛を感じているということの意味しない、とデカルトはのべた。……動物は神の手によってつくられた、無限に複雑な機械だからである。<sup>6</sup>

「動物は精巧な機械である」という動物機械論のテーゼをAとおき、「動物は意識をもたず、喜びも苦痛も経験しない」というテーゼをBとしてみよう。この引用箇所では、デカルトがまるでテーゼAからテーゼBを結論づけたかのように読める。たしかに、テーゼAからテーゼBを導出することは可能である。しかし、デカルトの主張といえるのは、テーゼAであってテーゼBではない<sup>7</sup>。テーゼAの主旨をデカルトがのべたことはたしかだが、少なくとも（シンガーが原註で参照している）『方法序説』にテーゼBの主張は見当たらない。また、「動物に感情がない」「動物は痛みを感じない」といった露骨な主張をデカルトがのべたとも考えられない。むしろ逆に、デカルト自身は『方法序説』段階の一枚岩的な動物間の同質性に疑念（不死の魂が動物にも認められるかもしれないという疑念）を挟み、動物にも恐れ・希望・怒り・喜びを見いだしうるとして、自らの動物機械論を修正する必要性を感じていた可能性が高い<sup>8</sup>。パスカル研究で知られる山上浩嗣によると、動物に「感覚 sentiment」がないと考えられるようになる発端は、デカルトの機械論的宇宙論と動物機械論に対するポール・ロワイヤル修道院の一部の院士たちの「奇妙な反応」にある<sup>9</sup>。デカルト主義者であることを自認していたジャンセニストの彼らは、動物に乱暴を働くのも生体解剖をするのもまったく平気だったらしい。シンガーも指摘しているように、動物を「時計のようなもの」と捕らえる院士らにとって実験動物の悲痛な叫びは「小さなバネがたてる雑音」にすぎなかった。デカルトの機械論は、通常なら感じるであろう「良心の呵責からのがれることを可能にした」<sup>10</sup>。この批判は、ポール・ロワイヤルの院士たちに向けられているかぎりでは正しい。しかし、同じ批判をデカルト自身にも向けるのは、（機械論の影響を受けた人物に、鋭い感覚の持ち主であるパスカルやルソーがいる<sup>11</sup>ことを考慮すると）正鵠を射ていないように思われる。つまり、機械論は諸刃の剣とはいえ一つの理論にすぎず、そこから先のジャンセニストのごとき冷酷な態度も生じれば、反対に、動物に対する温情的な態度も生じうる、ということである。

もっとも、後者の道を辿ったかにみえるルソーの人間像ですら、シンガーからみると平等主義的ではなかった。ルソーの描いた人間は「高貴な野蛮人」としてせいぜい「動物たちの家族の情け深い父親としての役割を与えられた」<sup>12</sup>にすぎない。近代の啓蒙主義運動全体が、シンガーにはスピシーイズムと映るのであろう。しかし、そうなると、「平等」の意味が改めて問題となってくる。シンガーの説く「平等」とは何か。それは、これまで人間相互でし

か語られてこなかった「平等の基本原則をヒト以外の動物にまで拡張すべきだという主張」<sup>13</sup>にほかならない。この原理拡張によって、(ヒトも含め)あらゆる動物が平等になる(あるいは近づく)と考えられている。ただし、シンガーは、トム・レーガンをはじめとするアニマルライト思想に強い影響力をもつ人物だが、「動物の権利」という表現を使うことにはあまり積極的でない。むしろこれを「動物の解放」という表現に代え、誤解を避けているようである<sup>14</sup>。性差別や人種差別との類比で「種差別」という語が説明されているために、従来の「人権」を連想しがちだが、「動物の権利」を人権と同等の資格で語ることなど不可能である。一般に、人権の基礎には、倫理的責任を担う主体としての「人格」があるが、動物が人間と同じように倫理的責任を担うると考える人はまずいない。つまり、「権利」を積極的に語ろうとすると、従来の責任を担う「権利主体」がついてまわるため、動物に「権利」を認めづらくなるというパラドックスがある。

そこで、シンガーは「平等の基本原則は同等もしくは同一の扱い equal or identical treatmentを要求するわけではない。それは同等の配慮 equal consideration を要求する」<sup>15</sup>と、このパラドックスを回避しようとした。女性と同等の扱いにするために男性に妊娠中絶する権利を与えること、人間と同等にするために犬に投票権を与えることなどは、無意味である。それは前者の「同一の扱い」を無理に推し進めようとするからだが、シンガーの考えでは、後者の「同等の配慮」に転換すれば有意味になる。ただし、「配慮の要求」といっても、理性や言語能力に基づく責任主体が基準になっているわけではない。シンガーはベンサムに依拠して「平等な配慮を受ける権利」を要求する。そして、要求が実現されるために特に重要とされるメルクマールこそ、「苦しむ能力(より厳密には、苦しんだり幸福を享受したりする能力)」<sup>16</sup>であった。投票の意味を理解できない犬に投票権をあたえるのはおかしい、動物は人間のように他者に配慮して倫理的責任を担うことができないから「動物の権利」を主張することはおかしいという主張は、ある意味で正論である。しかしこの主張は、シンガーからみると、理性や言語能力をもっている者にだけ「権利」を付与するという、ヒトという種に特化された(種差別の)平等観にすぎない。そこで、ベンサムの功利主義思想が必要となる。シンガーにとってベンサムは「理性や言語をもつことが線引きの根拠となる人びとは違って、誰の利益をもけっして恣意的に考慮から除外しはしない」<sup>17</sup>からである。快苦は「利益をもつための前提」であり、自己意識のある人間か、自己意識のない動物かを問わず、その「利益は平等に配慮されなければならない」<sup>18</sup>。このように、結果の利益配分に配慮し、動物にまで平等原則を功利主義的に拡張したことは、近現代の人間中心主義の盲点をつくという意味では、シンガーの功績といえよう。

## 2. 選好功利主義の判定：シンガーの「人格」概念

動物たちの「痛み」に目を向けさせるシンガーの動物解放論は、われわれの感性に訴えて

いるように見えるが、本人自身は「情緒や感情よりも理性に訴えてきた」<sup>19</sup>とのべている。その根拠はシンガーの標榜する「選好功利主義」の判定基準、いわゆる「いのちの線引き」にあるように思われる。すでにみたように、『動物の解放』では「苦しむ能力」を基準とし、苦楽を感受する能力の有無に応じて、その生命の利益に対する平等な配慮がなされる。今日では生産効率優先のためほとんどの家畜が集約的に飼育されるが、鶏卵農場では1年に1割以上の雌鳥が換金性のストレスによって死に、過密な畜舎では豚が共食いをしないよう尾が切除されるといった事実を目の当たりにすると、シンガーがなぜこの書の第3章「工場畜産を打倒せよ」という見出しを掲げたか、その理由がみえてくる。シンガーの書を読んでベジタリアンを志す人がどれほどいるかはわからないが、この見出しは、感覚に訴える以上に、社会における日常の食卓の異様なあり方、つまり構造的な種差別の連鎖という社会問題にわれわれの目を向けさせる。

しかし、「痛みや苦しみを感じる能力」のない生物に関してはどうか。シンガーがあげている2つの指標は、①生物の行動様式（身もだえ、叫び声、苦痛から逃れようとする行動など）と②生物の神経系（人間と似ているかどうか）であった<sup>20</sup>。①は直観的なもので、「苦しそう」と感じられるかどうか依存するが、②は現行の自然科学の発達段階に対応しており、新たな発見があれば、指標に修正が加わるかもしれない。シンガーによれば、哺乳類が苦しむ能力をもつというのは自明だが、爬虫類と魚類は哺乳類とは異なる神経系とはいえ、「中央集権型」の神経系という構造は類似するため、苦しむ能力をもつ可能性が高い。エビ・カニなどの甲殻類は昆虫に似た神経系で複雑だが、苦痛を感じるかどうか疑わしい。タコは軟体動物のなかでは発達した生物だが、同じ軟体動物でもカキなどの貝類は構造が原始的で苦痛を感じていると想像しがたい。このように推論して、シンガーは小エビとカキの間のどこかに線を引くのが妥当だろうと主張する。彼の推論は、科学的知見を交えているとはいえ科学者間の見解の相違もあり、一見するところ曖昧である。曖昧だが、日常生活のなかで気にもとめない生物について「ひょっとしたら苦痛を与えられているかもしれない」とわれわれに考えさせるには十分なのかもしれない。著書を通じてシンガーは、目の前の食材を食べることは正しいか？とわれわれに問いかけてくる。その指標は、ベジタリアンの「食べてよいもの／いけないもの」の基準にも利用され、表向きはわかりやすい。しかし、痛みを感じないとみなされる者（神経系が十分に発達していない胎児、脳死体、重度の障害者など）は、どのように配慮されるのかという問題は残る。

この問いを検討するために、シンガーが『実践の倫理』で行っているもう一つの「いのちの線引き」に触れなければならない。それは「人格 person」の有無である。先にみたようにシンガーは、デカルトやカントらの啓蒙哲学を人間中心主義的な「種差別」にもとづくものと批判していたが、「人格」概念を用いる際には、ロックに倣って「理性的で自己意識のある存在 a rational and self-conscious being」と規定する。カントではなく「ロックに倣っ

て」というのは、シンガーがカント由来の自律尊重の倫理思想を嫌うからであろう。カントにとって「自律」は、他から強制されずに、理性が自らの意志によって普遍的道徳法則を定める能力であり、「あらゆる理性的本性の尊厳の根拠」(KS, IV 436)とされていた。しかし、カントと異なり、シンガーの場合は「自律」の意味を「選択し自分で決断をなしそれに従って行動する能力」という今日的な意味に局限している。しかも、シンガーによれば「功利主義者は、自律をそれ自体のためには尊重しない」<sup>21</sup>という。

たとえば、カントのような自律尊重の原理に立つと、「自殺をしないこと」が自分に対する「完全義務」となる。しかし、功利主義の立場では、「〈死ぬことを選択していない人であっても、その人が生き続けるなら悲惨な人生を歩むだろうとの理由で、その人を殺すのが正しい場合もありうる〉ということ認めなければならないかもしれない」<sup>22</sup>とされる。これは「非自発的安楽死」を念頭においた推論である。本人が望んでいなくとも死なせたほうがよい場合というのは、明確な意思表示ができないほどの重い障害を負っているながら、苦痛に身を振じらせ続ける子どもを死に至るまで見守るほかないといったレアケースを想定すればよいだろうか。しかし、現代医療の現場では現実が生じることである。もっともシンガー自身は、「批判的なレベル」<sup>23</sup>という留保を付しているから、一種の思考実験ではある。この（一見きわどい）推論も、最終的に当事者の利益にかなうようにするための判断材料を提供する限りで、有意義と考えられている。選好功利主義者シンガーによれば、「ある人格の利益とは、すべての利益不利益を考慮に入れ、関連する事実をすべて勘案したときにその人格が選好するものである」<sup>24</sup>。このテーゼを基本にすえ、この利益の最大化を図ろうとするわけである。

シンガーにおいては、「自律」概念がカントよりも限定的に用いられているが、「人格」概念のほうは、限定的というより多義的かつ曖昧である。理由はこの概念が、人間と動物の両方に使われることにある。まず、「人間の人格」からみてみよう。先ほどの「理性的で自己意識のある存在」という「人格」の定義は、「胎児は人間であるのか」という妊娠中絶論争で注目を集めた問いに端を発する。シンガーは、ここで話題となった「人間」が「ホモ・サピエンスという種の構成員」の意味に限定できると判断し、この「ホモ・サピエンス」から区別するために導入したのが「人格」という用語だった。シンガーは、「人間」という言葉の第2の用法として、プロテスタント神学者ジョゼフ・フレッチャーがまとめた「人間性の指標」をあげている。その指標とは、「自己意識 self-awareness、自己制御、未来の感覚、過去の感覚、他人とかかわる能力、他人への配慮、意志伝達、好奇心」<sup>25</sup>である。先の人格の定義、「理性的にして自己意識のある存在」のより具体的な内容といえよう。シンガーの判定では、胎児は「ホモ・サピエンス」としての人間ではあるが、「人格」としての人間ではない。同様に、「胚、後期胎児、重度の知的障害をもった子ども、さらには新生児でさえ、自己を意識してはおらず、未来の感覚はもたず、他人とかかわる能力ももっていない」<sup>26</sup>。こ

のように同じ人間でも、自己意識やコミュニケーション能力をもっているかどうかで、「線引き」がなされる。シンガーのねらいは、「人間の生命の神聖さ」という宗教的意味を世俗化し、人間の生命だけに特権的な意味を与えようとするところから、人々を解放する点にある。

次に「動物の人格」である。この表現は「動物の権利」と同じか、それ以上に奇妙に感じられるが、定義に即して「動物に人格はあるか」を「動物に自己意識はあるか」という問いに変換すれば、言葉上の奇妙さを区別できるという。チンパンジー、ゴリラ、オランウータンなどの類人猿は「人間以外の人格のもっともはっきりした事例」とされ、クジラとイルカは、体系的観察が遅れているが、「理性的で自己意識をもっていると分かるようになる可能性は大きい」<sup>27</sup>と、ここでも科学の発達に期待が寄せられる。この「人格」概念が曖昧に感じられるのは、先にみた「苦しむ能力」という感覚レベルよりも高次の認知能力を動物に求めようとするからであろう。簡単な手話でチンパンジーと会話ができたとしても、人間の概念的思考力とはかなり異なるという印象をぬぐえない。発声器官が他の動物にかけているために、人間のような会話をしないだけだというのなら、その高度な知性を生かして、何かモノを発明したり、あるいは高度な文章をつづったりしてもよさそうなものだが、そうした記述は認められない。「言語をもっていなくとも、概念的な思考を行う能力をもっている存在は、けっして考えられないことではない」<sup>28</sup>とやや控えめな類推にとどまっている。「自己意識」のある「人格」なら、社会的義務や責任の一端を担うべきと考えるのが普通だが、その義務や責任が課せられるのは、同じ「人格」というカテゴリーに属する人間に対してだけで、他の動物にはない。逆に、シンガーは「妊娠3ヶ月未満の胎児と比較すれば、魚のほうが意識の徴候をより多く示すだろう」<sup>29</sup>とあって、胎児の生命の価値を「人格」のカテゴリーから外し、他の動物たちの生命の価値と同列に置こうとする。さらには「どんな胎児も人格ではないのだから、胎児には人格と同じだけの生きる資格がない」<sup>30</sup>とまでのべる。われわれの日常的直観を逆なでするようなこの論調はいったい何なのか？ おそらく一方で、人工妊娠中絶に踏み切らざるをえなかった女性という社会的弱者を支援し、他方で工場畜産の犠牲になっている動物たちへわれわれの目を向けようとするシンガーの批判的戦略であろう。彼はけっして嬰兒殺しを推奨しているわけではない。生命の尊さが強調されるとき、尊重されるのが決まって人間のみで、組織的な虐待に傷ついている動物の生命についてはほとんど気かけられないという、現行の不平等を是正したいだけなのである。彼の論点に多少の不整合や誇張があるにしても、シンガーの指摘する社会的不平等が持続している限り、われわれはその批判を甘受しなければならないだろう。

しかし、その点を考慮してもなお、シンガーの議論を読んだ後には、ある深いレベルの違和感が残る。たとえば、「苦しむ能力」は、〈神経系の複雑さ〉と〈みかけの苦しみの姿〉のみで測れるのだろうか。人間が社会のなかで抱える精神的なストレスは、他の動物の受ける



ストレスと同質だろうか。「重度の障害者は不幸しか作れない」とまではいわないにしても、「感覚の麻痺した重度の障害者には人格と同じだけの生きる資格がない」とシンガーはいうだろうか？「医療技術が発達している国では、出生前診断を受けた上で、場合に応じて中絶するということが日常的に行われている。これは当然のことである」<sup>31</sup>とシンガーは肯定的にのべるが、数多くの妊婦たちが後に「なぜ中絶してしまったのか」と自分を責めてしまう日本の現状を彼はどう考えるのか？「種差別」のドグマにとらわれているにすぎないと一蹴するのだろうか？

### 3. ネスの「自己同一化」論とホーリズム

シンガーが近代の啓蒙主義哲学の議論をスピシージズムの枠内にあるものとして、一括して批判していたことはすでにみた。動物の尊重が人間の側からなされるだけで、動物の「生命」そのものを尊重していない、といわれればたしかにそうだが、筆者にはシンガーの「動物解放」論が、近代の「人格」や「自己意識」などの概念を世俗化・相対化するあまり、平板な世界観に矮小化されているのではないかという疑念がある<sup>32</sup>。たとえば、森林浴をして木漏れ日を満喫するときや、野に咲く花に魅了されるときなど、われわれは植物とのかかわりのなかでも自らの「生命」を実感するものではないか。そこに古きアニミズムや宗教的な神秘説をもちこまなくとも、緑に生かされている共生の感覚があるのではないか。シンガーの論には、カキと小エビの間に引いた境界線からはみ出す者たちへの気遣いが完全に抜け落ちているように思われる。そこで最後に、ディープ・エコロジーの提唱者アルネ・ネスの思想をとりあげ、シンガーとは別の自然へのアプローチを展望してみたい。

ネスの「自己実現——世界に存在するものへのエコロジカルなアプローチ」という論文には、狭い近代的な「自我」を超越する「エコロジカルな自己」という概念を説明するにあたり、興味深い事例が紹介されている。それは、ネスが二滴の溶液が化学反応を起こす様子を観察していたときのことである。酸性溶液の入ったシャーレにノミが飛びこみ、苦しむ様子を何分にもわたってみるはめになった。ノミを救うことはかなわず、のたうちまわる姿は壮絶だったらしい。このときのネスが感じたのは、「痛みをともなう同情と共感 a painful compassion and empathy」だった。そして、この経験こそ、ネスのいう「エコロジカルな自己」を実現するために不可欠な「自己同一視」過程である。苦しむ様子を観察するという点ではシンガーと変わりがないようだが、その対象が動物ではなくノミという小さな虫であることがポイントである。「神経系」の発達具合はさしあたってどうでもよい。生あるものに身をよせ、「他者のなかに自己をみる」という強烈な一体感から「自然を守りたい」と感情がおのずとわきあがる——ここを起点にして、狭い自我の殻を破り、他者への共感・いたわりの情を広げてゆく。これが、ネスの主張する「拡大自己実現」の思想にほかならない。

喜びは主体（自我）のなかに存在するものであろうか。「否」と答えよう。喜びは、主体のなかに存在するのと同じ程度に客体（対象となる他者）のなかにも存在するといえるからだ。どちらかを無理にでも選ばねばならないなら、わたしたちに喜びをもたらす木の場合、喜びは本源的に木の「内部」に存在しているというべきであろう。とはいえ、こうした無理な選択を強いる必要はない。第三のとらえ方が可能である。喜びを、主体・客体・媒体が一体化し切り離せない特定の結びつきをつくるとき、そこに生じる現象、と捉えるのである。自己実現が達成されると、ある意味で、現実の限りなく豊かで喜びに満ちた側面を経験することになる。喜びを人間の意識のなかに存在するものと考えことは誤解のもとであると、わたしは直観的に思う。喜びに満ちるとは主観的な体験ではなく、意識をもつ自我より大きな現実に戻すべき現象である。これが、喜び、幸せ、人間の自己実現の基本的関係に関するわたしの哲学的説明である。<sup>33</sup>

ネスの思想は「ホーリズム（全体論）」と呼ばれる。シンガーの主張とネスの主張はまったく相容れない関係にあるわけではない。むしろ、両者の思想は重なり合う。しかし、人間と動物との相互の利益がうまく功利主義的に分配され、苦しみが縮減されたとしても、ネスが指摘するような喜びに満たされるとは思えない。やはり「木のなかに自己をみる」といった自然の客体との一体感と充足感がわれわれには不可欠であるといえないだろうか。無論、ネスの思想にも落とし穴はある。つつましい質素な生活に豊かさを認めつつ「生命へのいつくしみ」を標榜している人が工場畜産を支えているかもしれないし、自然との一体化が悪しき全体主義に転じるかもしれない。しかしながら、エゴを拒否する極端な解放論が新たな抑圧を生む危険もある。答えは、両思想の「間」というより、「対話」から見出されるべきであろう。

---

## 註

欧文全集からの引用は、文献略号 巻数（ローマ数字）、頁数（アラビア数字）の順に示した。

### 【文献略号】

AT: René Descartes, *Œuvres de Descartes*, Édition Adam et Tannery, Paris, Tom IV, 1901, Tom V, 1903.

Œ: Jean-Jaques Rousseau, *Œuvres complètes*, Tome III, [Paris] : Gallimard, 1964. ジャン＝ジャック・ルソー、戸部松美訳『不平等論 その起源と根拠』国書刊行会、2001年。

Al: Peter Singer, *Animal liberation*, New York, Avon Books, 1975. ピーター・シンガー、戸田清訳

『動物の解放』、技術と人間、初版1988年、改訂版2011年。

Pe: Peter Singer, *Practical ethics*, Cambridge, Cambridge University Press, 1979. ピーター・シンガー、山内友三郎・塚崎智訳『実践の倫理 [新版]』昭和堂、1999年。

KS: Immanuel Kant. *Kant's gesammelte Schriften*, hrsg. von der königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Berlin: Georg Reimer, Bd.IV 1911, Bd.VI 1914, Bd.XXVII 1974.

SR: Arne Naess, *Self-Realization: An Ecological Approach to Being in the World*. In: *The Deep Ecology Movement, An Introductory Anthology*, edited by Alan Drengson & Yuichi Inoue, Berkeley, California: North Atrantic Books, 1995. アラン・ドレングソン、井上有一 共編『デュープ・エコロジー：生き方から考える環境の思想』昭和堂、2001年。

---

<sup>1</sup> 人間は生きるためには食べねばならず、食べるためには他の生き物を殺さなければならない。当然のことのようだが、日常生活においてわれわれはこの基本的事実を忘れがちである。

<sup>2</sup> Al 187, 『動物の解放』 p.233.

<sup>3</sup> Al 192, 『動物の解放』 p.239.

<sup>4</sup> メアリ・ミッドグレイ「パースンとノンパースン」、ピーター・シンガー編、戸田清訳『動物の権利』技術と人間、1986年、p.105.

<sup>5</sup> デヴィッド・ドゥグラツィア、戸田清訳『動物の権利』岩波書店、2003年、p.6.

<sup>6</sup> Al 200, 『動物の解放』 p.250.

<sup>7</sup> ある人が先のテーゼAを共有したとしても、テーゼBとは正反対の、動物に豊かな感覚を認める立場をとることも十分可能である。たとえば、ルソーは、デカルトと対照的に自然の純粋な衝動「憐憫の情pitié」を重視し、人間の「魂の靈性」あるいは動物から区別される人間の無制限な「自己完成能力」を「人間のあらゆる不幸の源泉」(CE, III 142)と規定したが、それでいてデカルトと同様、「あらゆる動物のなかに精巧な機械しかみない」(CE, III 141)とのべた。

<sup>8</sup> たとえばデカルトは、ニューカッスル候宛書簡(1646年11月23日付)で「犬やその他の動物たちも、その情念 passions を私たち人間に向けて表現しています」(AT, IV 575)といい、モルス宛書簡(1649年2月5日)では「おそらく動物も私たちと同じように感じますsentire」(AT, V 277)とのべている。

<sup>9</sup> 山上浩嗣「デカルトの動物機械論と『パンセ』」、『仏文研究』第27号、1996年、pp.69-87. ポール・ロワイヤル修道院におけるデカルト主義の受容についてはp.73以下参照。またp.75では、動物に「精神(魂)」を進んで認めようとはしなかったデカルトが、動物の「感覚sentiment」や「生命vie」については明確に肯定した、といわれている。シンガーのデカルト解釈の不正確さは、多くの動物解放論者に共通するところがあり看過できない。たとえば、先に触れたドゥグラツィアは「動物=感情をもたない有機的機械」がデカルト説の基本線であり、かつ「動物は苦痛を感じることをさえできない」という見解をデカルトが示したとしている(ドゥグラツィア、前掲書、p.6)が、

この主張もまたシンガーと同様の曲解である。

<sup>10</sup> AI 201, 『動物の解放』 p.251.

<sup>11</sup> パスカルがデカルトの機械論の影響を受けた事情については、山上1996：p.69参照。ルソーに対するデカルトの影響については、ルソー、中山元訳『人間不平等起源論』 p.283, 訳注41を参照。

<sup>12</sup> AI 203, 『動物の解放』 p.253.

<sup>13</sup> AI 2, 『動物の解放』 p.24.

<sup>14</sup> シンガーが「権利」という語を微妙に避けている事情については、井上有一「『動物の解放』論とは何か」、山内友三郎・浅井篤編『シンガーの実践倫理を読み解く』昭和堂、2008年、pp.88-89を参照。

<sup>15</sup> AI 2, 『動物の解放』 p.25.

<sup>16</sup> AI 7, 『動物の解放』 p.31.

<sup>17</sup> AI 7, 『動物の解放』 p.31.

<sup>18</sup> Pe 65, 『実践の倫理』 p.90.

<sup>19</sup> AI 243, 『動物の解放』 p.306.

<sup>20</sup> AI 171, 『動物の解放』 p.213.

<sup>21</sup> Pe 83, 『実践の倫理』 p.120.

<sup>22</sup> Pe 84, 『実践の倫理』 p.121.

<sup>23</sup> 「批判的な推論レベル」と対になる語は「直観的レベル」である。後者は日常的な判断のレベルと考えられ、前者は、日常の直観を離れ、常識に対して批判的態度をとる思考レベルと考えられる。

<sup>24</sup> Pe 80, 『実践の倫理』 p.114.

<sup>25</sup> Pe 75, 『実践の倫理』 p.104.

<sup>26</sup> Pe 75, 『実践の倫理』 p.104.

<sup>27</sup> Pe 98, 『実践の倫理』 p.143.

<sup>28</sup> Pe 95, 『実践の倫理』 p.138.

<sup>29</sup> Pe 118, 『実践の倫理』 p.183.

<sup>30</sup> Pe 118, 『実践の倫理』 p.183.

<sup>31</sup> Pe 135-36, 『実践の倫理』 pp.224-25.

<sup>32</sup> シンガーの著書 *Practical ethics* は『実践の倫理』と訳されているが、具体的な事象に役立つ倫理という意味で『実用的倫理』と訳すほうが適切ではないか。

<sup>33</sup> SR 27, 『ディープ・エコロジー』 p.69.

## **What is the value of life?**

KAWAMOTO, Takashi

How do we think about life? Can we say that human beings are involved in the environment or their relationship with other animals is good? Peter Singer is a person who fundamentally questioned our lives, especially the manner of food in the term 'speciesism'. What should we think under today's circumstances? In this paper I would like to argue about Singer's concept 'speciesism', 'person' and Arne Naess's 'Self-Realisation'.